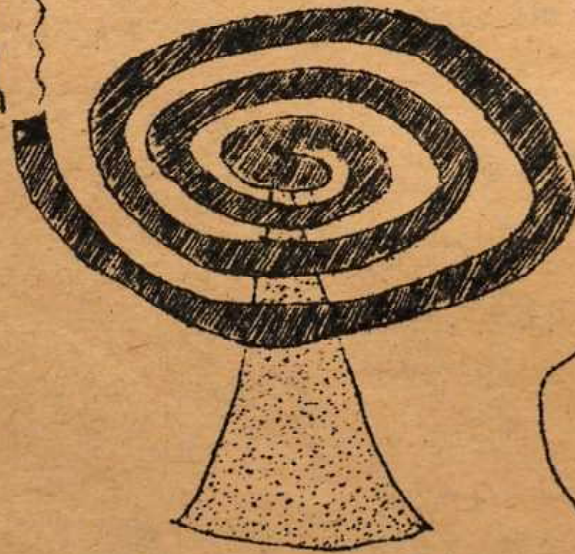


This is a.....

かき  
世









八散文

石川 芳美

お前は今 何をやっている。

本気で生きているのか

まだ気がつかないのか

首に縄をつけられそうになっているのが

それに おまえ何なにも抵抗しようとしていない

いまに おまえの体は がんばりがらめだ

ほら いま おまえの体は自由にならなくなるぞ

ちよつと飼いたと向いた

主人の命令はとうと動く 飼いたと同じだ

もう おまえは人間ではなくなる

いまだ 本気で生きるのには

もがいてみる あえてみる 動き出してみる

—私の母さな言葉—

知っていても知らないふりをするのが大人なら 私は知らない

いのに知ったかぶりをして。まじめだが非良心的なのが大人

人なら、私はふまじめだが良心的でありたい、常識を教える

のが大人なら、その常識を私は破りたい。礼儀正しいのが大人

人なら、私は無えでありたい。

このおそろしいほどの静寂

僕たちはこの静寂の中に 自然と身をまかせようとしている。

何の抵抗もせずに 何の考えもなしに……ちよつと静寂とい

く おそろしいほどの反力でおしつぶされていくようだ。そ

して、もうほんとどの仲間が静寂という左カによって人間と

いう 魂をすべてぬぎとられてしまった。もう僕たちには、

明日はみえない 今日を手さぐりで歩くだけ 静寂の中に身

をまかせだけ くれしさも、たのしさも、さびしさも、すべ

て静寂の中での出来事、真実の自分を失った。僕たちの叫

びは、すべておなじしい空まわり、もう一度 僕たちは、最後

の力をふりしぼるだけ。

今ふと頭の中をこつ叫ぶものがある

「だいたいな時が今 すきごころとしている。おまえはただ勉

強だけにあわれで、なにもなくなっていくのか。学校と家との

往復で一日をすごす。こんな毎日でいいのかほど。

(3)



友達と話し合うことをして来た人にと、それを受験のためには、英語の教科書とノートが開いてあり、いつでも読めるようにしておく必要がある。そして、自分自身をせめていくという事は、それだけ、勉強の能率が悪くなることにつながる。つねに勉強は必要なのか、とか、本当の勉強とは何なのかとかいうことを、真剣に考え、自分自身をせめていたならば、勉強すること自体がむしろ楽しくなってくる。テストで良い点をとろうとする者にとって、一流の大学に入りたい者にとって、こういう考え方をすることは、大きなプラスになるはずである。へ本当はそうではないのであるが、そして、こういう考え方を完全に棄てなければ、今の現状からいって、受験勉強は苦しいのである。



まうような試験。相手を受けおとし、自分を受けかれはというように考えまて起きてしまつようなものがある。はたしてこれが俺たちに本当に今課せられた勉強なのだろうか。カンニングであれなんであれ、人より一歩多く取れば、それでいいのである。頭のいい奴にするがしこい奴、頭のいい奴は冷淡な奴なのである。

私にとって、このいふことを考えていくことの目的は、自分

自信をわけていくことなのである。現に今、私の机の上には、英語の教科書とノートが開いてあり、いつでも読めるようにしておく必要がある。そして、自分自身をせめていくという事は、それだけ、勉強の能率が悪くなることにつながる。つねに勉強は必要なのか、とか、本当の勉強とは何なのかとかいうことを、真剣に考え、自分自身をせめていたならば、勉強すること自体がむしろ楽しくなってくる。テストで良い点をとろうとする者にとって、一流の大学に入りたい者にとって、こういう考え方をすることは、大きなプラスになるはずである。へ本当はそうではないのであるが、そして、こういう考え方を完全に棄てなければ、今の現状からいって、受験勉強は苦しいのである。

しかし、実際のところ私も、高校時代は大事な時だ。青春だ。すばらしい時だといつてはしゃいでみても、でも、やっぱりなんかそれだけでは、みんなに一歩おくれをとっているような、心配を感じないわけにはいかない。ひとりだけで「俺たちは若いんだから、話し合いをして、仲間をいちゃして……」



などといっている自分が勉強もしないバカ者のようにみられて  
 いるようで、常に、うしろめたさを感じる。私たちはどこ  
 か誤ってしまった。俺も男として生れ来たのらには、なに  
 か人のためになることをやっつて死んでいきたい。たとえち  
 ぢやなことでもいいんだ。これは俺がやっつたんであってい  
 るものなら。俺もどうせ死んでいくなら、あいつはいい奴だ  
 ったなあといわれながら死んでいきたい。昔のマンガの主人  
 公みたいに正義の味方でありたい、黄金バットが鉄腕アトム  
 今ならさしづめ仮面ライダーマとところかな。悪をたおし、  
 正義を身ぐる人間を通したい。どうせ生きていくなら、すばら  
 しい人生を送りたい、ひとの噂を気にしたり、世間の目を気  
 にしたり、まるで自分のために生きているのだから、ひとのた  
 めに生きているのだかわからないような生き方なんかしたく  
 ない。俺は俺自身のために生きるんだ。たとえ、まゆりがあ  
 んといおうと、俺の人生なんだから。

青春の讃歌 石川 勝美

ビートルズを聞いて感じるもの  
 キャンプファイヤルで感じるもの  
 うして今 感じていけるもの  
 かんが同じ 青春の時  
 今 門文といふこの時  
 体を感じる何かを求めて  
 青春のすばらしさを求めて  
 育ち出そつ  
 若い出そつ  
 若者はみんな仲間だ  
 何かを感じたら  
 いっしょに肩をくもつ  
 何かをつかんだら  
 いっしょに誇りあつ  
 青春という今を  
 明日じゃもう遠い  
 時はあまりにも  
 早く過ぎ去り行くから

この詩は昨年12月、板倉サークルでちえのゆ  
 の歌として、ある凡庸なる男に作られた  
 ました。残念ながらヒンメリの下の埋  
 か一、二回の発表のち、ぼこり下に埋  
 いたものさす。僕ちん青春を感じるり





# 放浪(第I部)

岩崎 征史

列車は夜の名古屋を通過している。赤や青のネオンがきらめき、人間だらけの街をくもし出していた。私はこの街に衰音をひびかせている列車の周期的な音をじつとさつきから聞いていた。なんかこのままどこか知らない闇の世界にたどり着いて、目的地になぞ一生到着しないような気がしていた。

すべてこの生活に疲れ、古都を参る人も多い。そしてこの私もそのひとりである。修学旅行で見た京都は京都でない。私は本物の京都を見るため、ひとにぎりの金と共にぶらっと出てきてしまった。ドン行ともなると夏の夜は人息でふんふんし、さびついたように動きの鈍い扇風機など、その存在が無に近い。あたりを見回すとさすがは女の子はいなかった。すすけた顔をしている男やひげだらけの男、頭に手抜いのほおっかぶりをしてる行商ぶりの中年女ばかり、もちろん男も背広など着ているのはひとりもない。東海道を夜を長くドン行列車は汗くさいにおいをまきちらしながら走る。あと五時間以上……。隣のたよりなさそうなおじさんは、さつき

まで私にいっしょけんめいに話しかけてきたが、スースー眠ってしまった。列車の端では、顔は見えないが、なんか、長靴をはいている男たちがささやかで盛大な酒宴を催しはじめた。静かな車内にその声は響いている。ささかしあの男たちのその人たちはうるさかろうと気の毒に思った。前に、さつきでいねおりにしていた中年の女の人が目をさすし、「今、どこを通過しているんです？」と私に問いかけた。少々あわてた。「あ、今？今……ちよ」と、ちよと待って下さい。いつの間にか、ネオンは消え山々をどおり抜けていた。「今、名古屋を出たばかりです。」「ああ、そう。おにいさん、どこへ行くんですか？一人旅ですか？」「京都までちよと。」「ああそう。私はもう少し、豊橋にちよと用があって帰って来たんだけど、こんな夜になっちゃってね……。」「おはさん電車なんて一年に一回か二回ぐらいしか乗らないだろ。だからこんなに乗って鈍さちゃうね。でも、もう少しだ。」「私は東京から来たんです。」「今、みんな新幹線で行くって言うのに。」「金がないんです。」「きれいな言葉を使うおもしろい人だ。その巧みさ口から出る言葉に赤面しながら、私



は答えた。

「金がない」から新幹線を利用しなかつたのではない。いや、それもあるかもしれないが、それは第一の理由でなかつた。いくら汗くさくさでも、このドン行列車に乗っている人は世の中を正直に生きている気がした。そして、見知らぬ人と会話し、見知らぬ人の歌を聞くなんてすばらしいことだと思つた。ところが新幹線はどうだろう。確かに現在の科学の生みだけつ作だ。東京―京都間を三時間足らずで走る。合理的である。しかし、どうも冷たい感じがしてならない。乗っている人もベールに包まれている気がしたのだ。そして、その長所さえ私にとつて第二の理由として上げられてしまう。東京―京都間を三時間で行つてしまふのは、僕にとつてあまりに短かすぎた。日本が小さく感じ、灰色の東京も京都もそんなに変わらないうやう。そして、疲れを十分いやすには、ドン行が最適だったのだ。

いつの間にか、おぼさんは降りていた。酒宴もなくなつてゐる。眠つたのだろうか、車内は静かだ……、再び周期的な列車の音を聞きながら、無意識に考え事をしていた。何故、

僕は、京都に行こうと思つた。たのだろうか？、疲れをいやしたのだ。じゃあ、別に京都じゃなくても良かったじゃないか。それなのにどうして。私には……私に京都はどんな存在なのか……。私は疲れをいとして、京都が見たいとがまんかたさなかつた。本物の京都が見たかつた。京都は団体の街ではない個人個人の街だ。その個人の街に美がある。京都は私の心の美だつた。修学旅行の時そんなもの感じたろうか、いや感じなかつた。京都は複数の人間の住むところではないから。私一人の心の置きどころだ。古い家・古い寺・古い道が突然美々となつて輝き出した。三島由紀夫の「金閣寺」の金閣寺同様、京都の街が深い種々の存在になつたのである。想像だけでも心は満ちていた。しかし今、私は京都に向かつてゐる。

現在、琵琶湖のそばをとおつてゐる。ああ、もう少しで京都である。

「ギョート……ギョート……」ついた。無意識に席を立ち、下車した。京都はまた夜の闇に包まれていた。静寂そのものだ。



た。この京都で下車した人は私を含めて十人余。私の隣にいた、あのたよりなきその男もいっしょに降りた。

夜明けまでまだ睡眠があった。駅の待合室で一眠りすませることにしたが、京都にいるという、奥意と興奮は、私を容易にゆむらせなかつた。しかも、静かか閨の京都がそのものを見せつけているようだった。

いつか、目をさますと陽は今昇らんとしている所だった。京都の夜明け。どこからか鐘の音が聞こえまきそうな気がした。

京都は高層建築は少なく、平屋ばかりだが、それでもやはり、ビルはたち、万博のために道幅もなかつた。それでもそのビルもいかげん勢ち着いてみえた。人間の目のえこみいさげに自分ながらあざされた。しかし、東京の灰色のビルとちがい、緑の生き生きとしたビルに見えたのだった。

朝の京都、歩いて鴨川まで散歩がてら、今日の計画をぬった。鴨川は確かに流れていた。朝の京都を流れていた。新聞少年は元気に新聞を配達し、街の角から、アクリルをした犬が歩いて来た。……京都はまだ鴨川だけが起きていた。

橋のランカンにもたれ、じつと流れを見ていた。見ながら思った。今まで、京都を美とあがめ、着いたといつては興奮し、京都の街を懐く高層建築にさえ関心を向けた。しかし、とうとう、今までの感情がウソのように、新たな珍しい気分は消えていた。こんなものだったのだらうかと疑ったが、しよのない現実の心だった。

京都は今眠りからさめようとしている。  
遠く鐘の音がひびいた。

これから何日か、こゝでの生活がはじまる。

八第一節 完

オニ部・オニ部は 秋面の都信で、誠に申し分けございませんが、すべて掲載できません。あらすじだけを紹介することになりました。全文の希望の方は作者に直接お尋ね下さい  
（編集部）



——オ、三郎 あらすじ——

見つめていた私のところに、ひとりの女性が現われる。私と同じ一人旅で、私に道を尋ねた。しばらくの会話の後、私と彼女は、一日共にすることを約束する。彼女は、北海道の札幌から来た人で、年は、三つ年上だった。洛北あたりをまわり、訪仙堂の庵おとしを聞きはれ、いつまでもその首がはなれなくなる。二日目、彼女は九州に向かい、畢竟的に一人になる。ひとりで薩摩野を歩く。三日目、市内にはいり、その後、金閣寺で、池を望み、一日目、鴨川の橋の上で、消えた。感情について考えた。京都はけっして期待はずれな所ではなかった。あのよう感じたのは、京都が想像、空想の京都でなく、自分の身体の中にも京都がはいり、京都に対する感情が身内にはいりこんだのだ。このぐらゐの旅で、本当のこととは書けない。だから今書いたことも、空想だけで、本当はちがうのかもしれない。しかし、自己満足し、故郷に戻る、帰りの列車、再びドニ行だが、行き以上、京都は輝いた。一日中歩きまわつた京都、河原町の人間模様、西京極のにぎやかさ。故郷はだんだん近づいている。ゆっくりであるが近づ

いてるのである。確実に、そして、輝きも増していった。

今、10年以上年をとつた感じでした。

狭い日本、京都の美は日本人の美として、たとえ地球がほろびようとも、このまま残しておきたい。一人旅の京都、行って良かった。これからの生活が再びはじまることを待たなくなつた。

♡一人ぼつちの世界♡

心のつれづれ (日記)

鳥羽 和枝



○月×日

短がった休みも、いよいよ終りです。この休みは、これと  
 いうて勉強もしませんでした。しかし、人間としてほんとな  
 く成長したよう気がします。ある日は、友達と語り合ひ、  
 またある時は、一人理由もないのに、涙を流し、レコードを  
 聞いて、何か希い感動を、覚えたりしました。なんだか、い  
 つもの自分でなかつたようは気がします。  
 この前、ある一つの目標を、又めました。それは、コト一日何







生きて、いけませんよ。これが、大間かも？

○月○日

「友情」の本が、さっき読み終わりました。  
このよう日は、よくありことだと思えます  
母が叱かし、おちためて、恋のおそろしさと  
言うが、強さ、いじ、少しづつ力、を感じま  
した。恋をするに、無意識のうち、友達を  
傷つけ、小指の罪を、犯しているのです。  
もし、かして、恋に、魔法使は？

(11)  
今の私は、友達を、大切に思っています。私のあ  
る友は、「同性の友情は、多く成り立たない。  
もし、移いもので、結ばれた友情を望むなら  
それは異性の友達だ」と言います。さ、と  
同性というものは、心の中に、不互いが、敵意

らしきものを、いざと、いうのでしよう。

私は、一人の人間、心で物事を感じることに  
できる人ならば、そんな、異性であらうと、  
同性であらうと、頭の中で考えているような  
友情は、ありえないと思えます。いくら仲の  
よい友でも、その間の友情を、成長させてい  
くことを、みんな望んでいるはずですよ。

この人が、私の親友だ、と思つのは、その友  
と、自分とが、少しでもはなれてしまった時  
はじめて、自分にとつて友の存在の大きさに  
気づき、その人が、親友ということばに、  
あてはまる人だった、と思つのでは、ないで  
しょうか。





(12)

○月○日  
今日は、ある本の、あとがきで、次のよう  
な文をみつけました。

孤独な人間は、この戦争が厭だと思っても  
向にも出来やしない。手を拱いて召集の来る  
のを待っているだけだ。そして召集が来たら  
屠殺されるのを待っているだけだ。もし向か  
ず、此処に組織のやうなものがあつて、戦争に反  
対する人間が、一諸に力を、合せて、この戦争  
を阻止できるものなら、今の僕等は、悦んでそ  
れに参加するよ。ちっほけな孤独な人間か、抛り  
投げて、みんなの幸福のために闘つよ。  
戦争はないにしても、二れに、下たようにな  
るとか多くさんあります。そして、あまりにも  
孤独な人間が、多すぎます。私も、もう少しし  
て孤独な人間に、なる所でした。



人々の心は、  
歌は、はより、  
はより、  
はより、

大きい世界のちっちやな心  
(ビビ)

あの風に乗って  
このちっちやな日本をみつめました

あの風に乗って  
このちっちやな地球を、見つめました。

あの風に乗って  
ひとつぶの涙をみつめました。

こんなちっちやな世界で  
人は、大きい何かを  
見ようとしません

そして  
つめたい風が  
人の心を、ひやしてました。

しかし  
だれも気づきません  
人は、自分の心を知りません

あの風に乗って  
人のちっちやな心を

あの風に乗って  
人のちっちやな心を  
のぞきました……



自分の希望をみたすため



今

俺は生きている

何故俺はこの世にいるんだらう

勉強するためか

遊ぶためか

なにをするために

生きているのか

だれかこの迷えるバカ者に

よい答えを

人々は言う

祭しむため

仕事をするため

よりよい社会をつくるため

よりよい社会をつくるため

自分の希望をみたすため

なぜか俺にはわからない

こんな俺は

この世に生きている資格がないのでは

神よ仏よ天よ

われを助けよ

いつかわかる日がくるだらう

いつかこの世にいることのたいせつさが

（山本金光 無題）

きのうのつぶやきに耐えられず

今日まで逃げてきたのに



よけいに昔しくなっただけだ

どこへ行っても同じなんだ

自分から逃げればかりいでは

もっとよくみつめろよ

自分を

そうすればわかってくるよ

逃げだしたくなりはいしないだろう

死をよくみつめてみろよ

となりで大きな口をなげてまっっている、

中は真暗だぜ

そんなにその中へ行きたいのか？

行きたくないだろう

もどって来いよ

明日からまた一緒に歩いて行こうじゃない

か

古い夢なんか捨てて

新しい希望を持つとっじゃないか

さあ早くゆ

もどって来いよ

へ山本金光

無題

K-Y

# 今、こう考える

新井宏充

幾度かこう考える時があった。そして今も考えている。頭の中のかたすみから突然現われ、いつの間にか気がつくくと消えている。それほどたいした問題ではないかもしれない。しかし、そのことを考えると、アワビが岩に



(15)

くっついてはなれないように、矛盾が頭の底にへばりついている。そう考えると自分がいやになる。一般にいう自己嫌悪にならざるを得なくなる。自殺したくなるなどというだけされたことではない。しかし……

俺はこの人生において何坂か歩んできた。何歩進んだかはわからない。でも、どんな結果であれ一歩づつ、とりもどすことのできな  
い歩みを続けて来た。その歩みの中で一歩進んでふり返ってみる。しかし、いつもそこには……

俺は新聞部に所属し色々と活動をしてきた。その中にさえ多分に弊にそれらはつきまとうへんこうして考えているから、それが極端な

までに現われるのかもしれないが。今考え  
そして、弊につきまわっているもの、それは、  
その前に一つの事例をあげておきたい。一  
冊の本だへこの本を読んでこう考えるように  
なったわけもある。『日本人の忘れもの』  
（会田雄次著）の中の『劣等意識の正義化』  
ということだ。といつてもぴんと来ないと思  
うのでちよつと引用させていただくところだ。  
「劣等意識は何かのことで自分が敗者になっ  
た経験それも継続的な体験から生まれる。……  
……劣等意識はどんなときでも、自分の掲を  
取り戻そうとあせっている。……学生の要  
求は一見まともに見えるが要するに大学には  
いった以上、さらにその上の努力や能力によ



(16)

選別はやめろ、平等に特権を与えるのである。あるいは、社会へ出てからも選別するような社会をやめろ、か、もっと楽に自分たちだけに支配者の地位を与える社会を作れということにすぎない。』ということである。これを讀んで俺は考えた。俺達は新聞をつくり、またその他色々人に働きかけて来た。しかしそれらはすべて、劣等意識の正義化。つまり、俺達のやっ来て来た活動は、俺たちだけが考えよきて、それらが実行できなかったのよ、その劣等意識を正義化し、他の人々にひろめていたにすぎなかつたのではないだろうか。また、クラブだけでなくても他の人達だ、てそらだ。それは、長髪の自由化。』ということだ。

言えると思つ。我々は主張する。我々の自由を束縛するな。』でもそれは、短かくてはいやな、長髪にしたくてもできない、つまり劣等意識をもつ人達が、都合のよい校則をつくり正義化しようとしているようにしか思われぬ。』自分もそうであつたのだが。その他にもこう考えると色々ある。しかし、ここで俺が言いたいこと、いや考へてゐること。常につきまとうことはそれらではない。それは、自分自身の行動や考へた。前例に述べたことは、真剣に考へたことだ。しかし、クラブで活動をやつてゐる時はその活動が当然なような顔をして、不審を抱かなかつたはずである。つまり俺は都合のよ



い方向へといつも傾いてしまふのだ。いつかクラブで、酒・タバコ・パチンコはやめよう"という新聞を書いた。その時はいい子になつてあたりまえの顔をしていた。レカレ、俺は、酒を飲んだことはある、タバコもパチンコもやつたことはあつた。別にそれら、今まで歩んできた人生を決して後悔はしない、いやレたことはないが、頭の中のかたすみから、突然現われ、いつのまにか考へて行き、常につきまとひ、今考へている。人は二重人格ではないだらうか"と。

この文は、早く言うところ「読後感想文」みたいなもので、身まぐれに書いたようなものだ。

そしてこの考えは明日にも変わつてしまふかもしれない。でも今こう考へたという事実を記録したことの尊さを感じる。俺は今という時を大切にしたい。それ一心で書いたわけだ。不審な点など色々あると思うが、気にしないで読んでいただけたらと思う。これは、心によこぎ。たつ車の影にすぎないのだ。俺の気持ちを書き留めていただけたら幸いです。



雅 移

ただ今の時刻の……地球の石物に推  
 移があり時の流れが止まらない限り誰れにも解  
 けられない。そしてそれは一番露骨に感じさせ  
 るのは人間だと思ふ。とりまも地球の人類中と思  
 ひに回つてソると考えマソるから、こう思ふのか  
 きのことか記されてソた。この時のことは日記  
 も知らない。よく人が「あの頃がよかった」と  
 言ふのを聞く。それは単なる回想にすぎないけ  
 れども、たとひ現実との違ひと懐裏にかすめ  
 りるはず。私は回想するのが好き。とソつても  
 現実から見たなら進歩は0に近い。もっと有効  
 に時間を使つた方がソいと思ひながらだから自  
 然に過去の世界へ引き込まれてしまつた。とソ  
 た方が良ソと思ふ。特に授業用のノートを見マ  
 白と信じられたいくらいに時計を見ない時間だ

ソてしまふ。ラク書きと共にプラスの雰囲気

高一 4巻 現国のノートより一なせか隣りの志ん

恋愛小説  
 規則正しい波  
 つるばこうせい  
 別冊掲載

高一の終り「今日は一年生最後の授業の日、  
 明日こそは……今何？」  
 高一の終り「今日は一年生最後の授業の日、  
 明日こそは……今何？」



ると信じられはくらくら

高二、% 現物のノートより一なせか離りの忘れ

人聞らしきもれが私に 時間と何回も尋ねる。 たった十七年と七ヶ月二十四日目の今 1

時計がなりのか？と聞く。見つけると。 移の感覚を強く感じてしもう自分が寂しいと思

もう時間はない。この疑問はいつものように。 気が持ちは薄々なり事実だけ、現物が徒らに

おまえに譲る。 高三、% 雑記ノットより 過ぎる中中で、その静けさに絶えられなくなる

「思うにす。 直行の思ふと手にと

いりムダでもいり試してみたい。 みる。そこには楽しさよりも空しさがあるけれど

そして今、高校生活を観み。今何を為すべ 空虚な時間になると思。た。ともあるけれど

「ヤカ」という現象。 振り返。て見るのも大切なので付。と思う

ノートを書いたり読んだり。 現物の頃。悲しさや嬉しさ。昔。さるおきざりに

は、現実つまり毎日の学校生活（家と学校。 一。い。と。が。で。き。る。現。実。も。見。え。な。い。と。思

性復）による。マサト。マ。い。決。論。な。ん。て。本。ま。い。な。い。と。思。う。と。思。う。と。思。う。

イへも。ただ何かのさ。かけ。例え。ば。し。は。い。な。い。と。思。う。と。思。う。と。思。う。

Rマの結し合。い。や。ク。ラ。ッ。パ。の。討。論。会。と。い。う。事。は。い。な。い。と。思。う。と。思。う。と。思。う。

(19) に。つ。い。た。と。き。だ。け。時。を。起。こ。さ。れ。る。と。思。う。と。思。う。と。思。う。

と。思。う。と。思。う。と。思。う。と。思。う。と。思。う。と。思。う。と。思。う。と。思。う。と。思。う。と。思。う。



(20)

—無題—

岩崎裕子

私は冷たい人が好きである。

誰しもが冷たいという人である。

外見が冷たくても 冷たくしていても

ホントは心の中のあらわせない

正直で 無器用な人だと思っからだ。

私は頭のいい人にあこがれる。

数学が得意で 英語がペラペラ

こんな人ではない。

バカになれる人である。

いやという時だけ

リコウになればいいのだ。

ホントに頭のいい人は

バカになれる人だと思っ。

一人でいることに堪えられる人

私はこんな人を尊敬する。

一人に堪えられない私は

まわりを気にする小さな人間。

だからそんな広い

むしろは悟りキッている人に

ひかれる。

男も女も こんな人が好きだ。

でもこんな人がいたら キッと

変人だと言われているだろう。

そして

そんなことを言っている私も

変人なのかわからない。



(21)

私は三年間いっせいに何をしてもたんだらうかつ。も考えなくなりました。いつのまにか集団の中  
 で自分を振り返ってやる。なんとなくやる世にうすくま、てしす。たんだす。それかうとい  
 ない思いがします。自分の信念というものをしうものは何に對してもいいかげんにしてきたあ  
 かりと持たないために。最後する力一杯自分うです。何が原因かのかつと考えをけても、あ  
 がやれるところあるや、たという感じがわりてまりにもそれか当然の二つのうにか、てしす  
 にかいのです。いつも中途半端。あるいは何も、た今では考えようとしてもお、くうにな。て  
 せずにはいるだけなのです。最後するや、たしす。たんだす。さあおすりにも一秒一秒一  
 といつサツヤカを感じて高校に入、まのうといつ一回は無駄にしすぎたんだはなにかと思、て  
 うものは全然とい、こいほとないのです。こむるのです。いつも西丸のこはかりで少しる  
 んは後味の悪い思、はしたくないと思、ながらも楽しもうなと軽い考えを少し自分に甘か  
 も結局いつも同じ場所を歩いてるのです。入、たんだはなにかと思、うのです。もう少し自分  
 学した頃はおだ、かにクソ、三無主義がなんだにきびしくてもいいのではなにかと自分なりに  
 四無主義がなんだと思、い。私、自分なり精一反省をしてみました。さあ急に直すといつに  
 杯や、てみせるんだなんて、い、こと言、こいとは無理かもしない、少しすつ、ほんの  
 片のさす、一、一回、一回、過ぎてせん、せん、せん、せん、少しすつ、ほんの



私は一年中や二年中や三四年中やおしんをしては友達がいなくなる。この人々を思いや  
 がありせん。何をすることも少なくてもあります。今、私のおわりは光る眼で他人を見てい  
 可能性があるのです。私がもう少し早く気づいて人達ばかりだけれど、少し心を解いてほんの  
 ていたなり。もっと大切にしたい人はあります。少しだけ苦しめてみたいと思ふのです。そ  
 思ふのです。それは後に、こわがることのあるうしろ少しは淋しくなると思ふのです。  
 うるす。でも出来ないうちが気づいたよりも早く勇気を出して声をかけてみたいと思ふです。  
 く見返してほしく思ふです。そうしていきなり、  
 も、と有意味になると思ふのです。今の私は、  
 振り返る余裕もないのです。後を見ずに、  
 ひたすら前を見るだけなのです。すると気づか  
 りませ、こしよ。て予定は思ふかうに動かせ、  
 何も出来ない状態です。やるだけや、てからか  
 らいいのすが、何もやらない前にます。これ  
 も自分の責任であ、て他人に助けを求めてもし  
 りあせ、こしよ。て予定は思ふかうに動かせ、  
 何も出来ない状態です。やるだけや、てからか  
 らいいのすが、何もやらない前にます。これ  
 も自分の責任であ、て他人に助けを求めてもし

無題  
 毎老原秀美

神様のおくりもの



## 神様のおくりもの

むかし、むかしある村に、おじいさんと、おばあさんが住んでいました。おじいさんと、おばあさんには、子供がいませんでした。もう二人とも年をとって、いましたので、話し相手の子供がとつても、ほしいと思つていました。

ある時、おじいさんが町へかいものに行きました。すると、目の前に、大きな木に、白いものが、ぶらさがっているのがみえました。

なんだろう・・・と近くに、おじいさんが、よつてみると、それは、白いひげの年おいた神さまでした。神さまは、空を散歩している時に、まちがって雲から足をすべらせてしまつて、白い着物が木にかかつて、ぶらさがつていたのでし

た。おじいさんは、神様をたいへん気のどくに思い、すぐ、たすけてあげました。神様はたいへんよろこんで、

「あなたの望みを、なんでも、かなえてあげましょう。」といいました。

おじいさんは、最初はえんりよするものですが、すぐに、即！

「実は、子供がほしいのですが、し」というと、神様は、

「それでは、二人の子供をさすけましょう。家にかえつてみなさい。ホンダラホイホイスタコラコ」といって、神様は消えてしまいました。おじいさんは、買ひ物もわすれて、エッサ、エッサと、かえつていきました。



家にかえった。おじいさんは、台所に二人の女の子をみつめました。

二人の女の子は、たいへんよく働き、そしておじいさん達の世話をよくしていました。二人は、仕事をするとき、いつも「エッサ、ホイサ、エッサ、ホイサ」と、かけ声をかけていました。ある時、この村に台風がきました。台風は三

日三晩あばれて、かえっていききました。おじいさん達は「よかった、よかった」と、よろこびました。ふと、みると女の子がいません。おじいさん達は、あちこちさがしましたがみつかりません。ガツカリして家にはいろいろとすると、山の方から、「エッサ、ホイサ、エッサ、ホイサ」と音がきこえます。おじいさんは驚いて、すぐ外へ出てみました。すると、この前あった

神様がいました。神様は「あなたたちに、さすけた女の子、すまんが都合があつて、かえしてもらいたいんじゃない」といいました。おじいさんは、たいへんかなしみましたが、それを承知しました。だって神様だもん！ 神様は、そのおわびに、おじいさんに、若がえりの菜をあげました。おじいさんは、それをもらって家の中へはいりました。それから、おばあさんにかつきのことを話して、二人で、オイオイ泣きました。数時間後、二人は、泣きやんで、神様の、おくりものの葉をのんで、二人はいつまでも若い夫婦でたのしくくらししました。

おしまい

山崎礼子



私の道

私の道は 一本の舎田道

狭くて心細くて ぬかるんだ

そんな道を私は 捜したい

どんな時でもくじけずどこまでも続いている道を……

私の道は 都会の中の道路

堅く 仄々 おおった うその道

他人のキによって作られた道

そんな道を私は 捨てたい

どんな時でも自分自身で歩いて行きたい!

一本の舎田道はいつかとぎれいつかとぎれ歩みは止る

それでも歩いて行きたい

一歩 一歩に たましい をこめて

人生の中の 私の数々の道を……

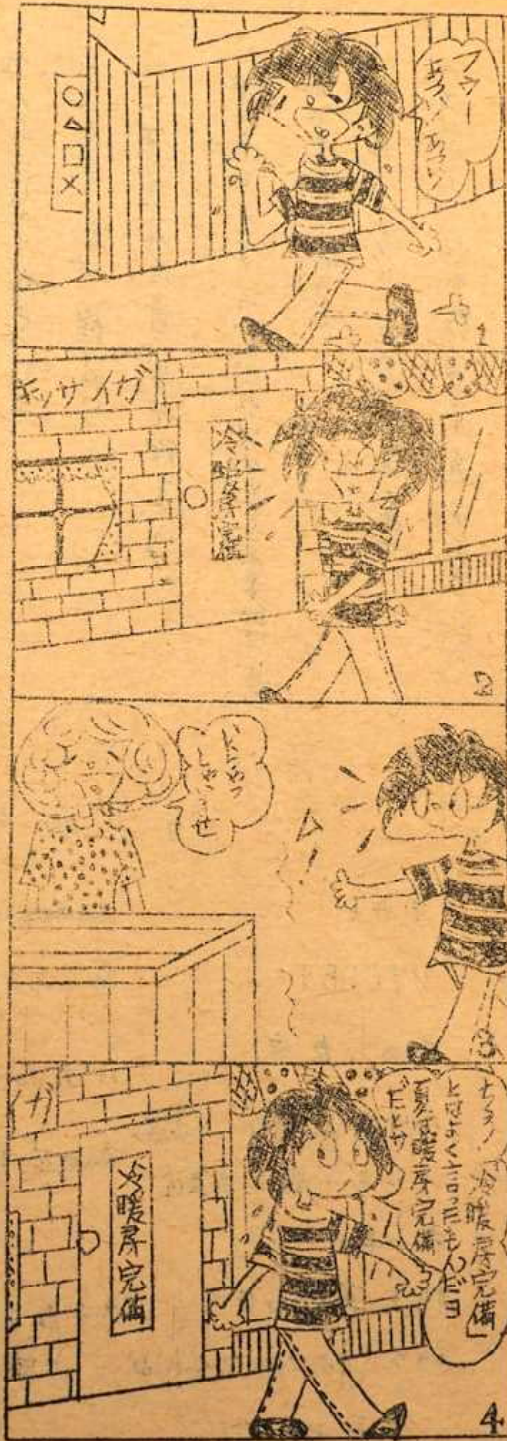
すみれちゃん

すみれ	私のかわいい姉妹	かわいいそうなすみれ
VIOLET	私をこまらせる かわいい悪魔	何も言えず
私の不友達	バカなすみれ	愛しているとも
かけがえのないお友達	私の買った一匹の愛犬	好きだよとも
いつも一緒のお友達		ただ泣くだけ
私の毎日		さよならする時も
私を裏切らない	でも私を……	そんなすみれ大好き
私をたよりなくしてくれる	一番好いてはくれぬ	
すみれ……		





(ネタズレ)





夏の詩

あおば しげる

二つの日だ、たろう

二の青い空を待った日は

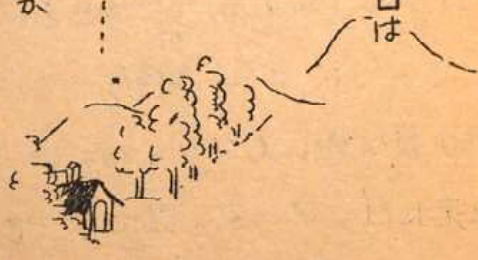
灰色の雲の

今にも僕の心を

破滅させるような

そんな、そんな……

待ち遠しかった青空が



二つの日だ、たろう

二のせみの声を待った日は

陰うつな雨の

虫の音ひとつしな

地におちこむ音は

つら、つら

毎日だったあの頃は

二のまま青い空は

僕の目の前に現われな

気がしたのです

今にも血の雨が降りそそぎ

その洪水は家屋を押し流し

人の心まで奪ってしま

ようなそんな毎日でした

明るくすばしい陽の光は

今、再び戻ってくれました



49年  
盛夏

# 暑中お見舞申し上げます

頑張っているのがなあ。

冷たい飲み物がさわやかにのどを通りすぎて

今、とってもいい気持ち

今年の夏は短いんだ、さねえ。

海水浴に行つて、まっ黒になってきましたか

それとも

かとりせんこうをたいて

ゴロ寝しているのかな？

男の子4人 女の子6人

今、お昼の話をしていたんですよ

ああ お腹がすいたあ

ジャあゆッ

たべすぎないでね



今、お昼の話をしていたんですよ  
ああ お腹がすいたあ



天と地と として人聞と

館3 藪部英夫

ぼくはいま、この岩舟山の三角点に立っている。眼下に広がる関東平野はどこまでも続き、空ははてしなく蒼い。

この地方の人達は、この山を仏が極楽へへぼって行く所としていた。その慣習が今では山のお寺の商いとなり、年二回の大祭の時には、この地方の死人ができた家々に、一かたぐ様の当山に来ていただく日時は、〇月△日です。シなどといったハがキをよこすのであった。信仰がまったく儀式化してしまっていた。

ぼくもこの山に生まれてから二度来たことがある。一度目は幼稚園の時で、二度目は高校二年の冬。一度目は四つだった妹のため、二度目は大十だったおばあちゃんのため。

そしていま、山は変わった。十一年前、幼さな心にも、石切りの工場ができていたことは残っている。しかしそれは山はだが少し、ほんの千ヨツピリ、まるでハゲでもつくったようなものだった。それが一年前の高校三年を目の前にした春休み。国鉄西毛線が岩舟駅のホームにすべりこんだ時、皆すじがゾツとするのをおぼえた。山は切りくずされているいや切り倒されてる。山に線があるのが、かすかに岩舟山のシンボルである、おぼえ



の石段の回りだけ。ほかはすべて切り崩されている。山に緑がないなんて、恐しい光景はない。人間がした「開発」という名の最大の罪だと思える。その恐しい光景が、仏が極楽へのぼって行く山、岩舟でおこっていたのである。それが去年、...

そして今日。ぼくは一人でこの田舎町におり立った。大黒の峠はあれほどにぎやかだった。駅前通りは、きたない、おいぼれた犬が足をひきずって歩いているだけだった。駅前通りを北へ五十Mほど行くと、もう山の麓だ。松の木がいく本となく並ぶはじめ。五分ほど歩くと、岩舟山の石段にかかる。それを数百數十段いっきに上った。ちよっぴりしんど

かった。山の上は平になっていて、さすがに寺の本堂や三重の塔があるだけあって、緑は残っていた。しかし大黒の峠とはまるでちがいで、聞えてくるのは、風がゆらゆら、竹の音だけだった。いい作りの朱塗りの、三重の塔の横の道さのぼり、山頂へと足を進める。あたりには異様な死人の名の書いてある塔婆が並びはじめ。気にせずどんどん行く。そしてぼくは三角点にたつた。三角点より五Mばかり南へ行けばもう山はない。地上まで一直線に山が切り切れている。

ぼくは後のポケットから手紙をだした。そしてやぶった。石段を上がって来る時、かぶくろはどんなに悲しむだろう。おやじはどい



(31)

ほど、...と思ったが、今、この三角点に立  
つと、もうどうでもいような気がする。死  
にたいという気持ち、強いというわけではな  
い。ここから飛んでみたいんだ。時計を見た。  
九月九日、水曜、冬の太陽はまだかがやいて  
いた。三角点より南へ三歩進む。蒼い空があ  
り、そして白茶けた大地があった。「俺んだ。  
そう思った瞬間、大地は回り、日本は動き、  
世界は終ったと感んじた。

ぼくの人生はすべて悪魔がとりついていた  
ようだ。ぼくには三っ年下の妹があった。そ  
の頃、ぼくはかとなしい坊やだった。それに  
比べて妹はヤンチャだった。いやな顔だった

三輪車にぼくが乗っていると、あとから来て、  
ぶんどって、すごい顔をして、乗ってしま  
うのが妹であり。そしてベそをかくのがぼく  
だった。ぼくが字をならっている時には、黙  
けまいとして自分もおぼえてしまったのが妹  
である。グラブがほしいとせがみ、物置き  
にロープをつるし棒を結んで、それに得意々  
うに乗っていたのが妹で、後でたまっておし  
ていたのがぼくだった。ケンをすれば、い  
つも勝ったのが妹。その俺の妹がたった二日  
で、何も言わなくなった。

暑い夏の日だった。おばあちゃんにおぼさ  
って帰ってきた時、口からあけき出していた  
妹。日本地獄らしかった。高温につぐ高温。



病院の先生や両親の必死の看病もむなしく、この世を去っていった。ぼくが夏を嫌いになつたのは、この頃からだと思ふ。

その影響からだろうか。小学校の二年生まで、おとなしかつたぼくは。しかし三年になると、目さみはるほど活発になる。そしてあつというまに、小さな田舎の小学校のお山の大将になつた。中学校に入学しても、その地位はゆるがなかつた。ぼくの性格の下地の完成である。そのように小、中学時代はつむじ風のように過ぎていった。

そして高校入学。彼、藤原は一番でぼくが二番だった。彼は市役所勤務の父をもつ、極普通の家庭の人間だった。勉強すれば、先生

にできないことまでやっちゃう。将棋をすれば関東で五本の指に入る。スポーツをすれば百Mの市の記録をもっていた。それでいて、それを鼻にかけないのだ、まったく。ぼくは少なからぬショックをうけた。しかし彼とじっくり話したことはなかつた。あまり彼は話を好むといったタイプではなかつたようである。いや実際ぼくがそれをさけたのかもしれない。その彼と二年に進級してクラスがいつしよになつた。彼が委員長でぼくが副委員長だった。そして時は流れる。

燃えつきそうだった夏の太陽は弱まり、夜はコオロギの天下になってきた頃。学校では文化祭の準備がはじまっていた。ぼくのクク



普通の家庭の人間だった。勉強すれば、先

ラスは「クラス決議」により何もやらぬことになつていたので、クラス役員のぼくと彼とは会場案内の役員になることはわかつてはいたが、ホツとしていたのだ。でも千ヨツピり残念な身もしていたのだが。

そのうち、ぼくと彼とは会場案内の役員にさせられた。クラス割り当ての役員である。みんなの一勢の「意識を」で決まってしまう。わかつてはいても、しよせんクラス役員なんて、小遣使いなんだと思つた。

(33)  
ぼくの学校は昔しかりの男子校だった。だから秋の文化祭は女子と「おあつ、おら」に交ぬることのできる時。だから文化祭には、いつもはしよぼくしている連中でも、水を得た

魚のように元気すく。そしてリそのカはひとつにまとまり、連体をうむ。それがおせかけのものであつたとしても。

彼は女性にはあまり「縁」のないように思ふた。たかり安心していたのである。ぼくと同類だなんて。

そして文化祭の当日。その日は雨がふつたりやんだりのあいにくの天候だった。「実行委員長」の責任だ。トなんて言っている奴もいた。ぼくと彼の役は、各会場を回り、異性具合をみる、交通整理の役だった。二、三時目がすきた頃。ぼくと彼は、二人の女性と目が合った。すると一オの女生徒らしいほうが彼に、映さずべ、こう言つたのである。「より



藤原君の会場の係なり、じや案内してよ、よ  
ろしくて。上彼は彼のない返事をした。彼女  
は髪が長い、ひとりの美しい女だった。が  
活発さの中に、どことなく不安がある。

「彼サ、何者なんだい。」心の中に、ある種  
の微動を感じた。ぼくは彼をこうたずねた。

「ああ、俺が中学時代の同級生さ。」

文化祭。学校中が着さで燃えんばかりの雰  
囲いだ。た、ボトムがあげれば、全然すくいも  
ある。やさしいも屋に燃しげいまである。たば  
け屋しさもや、てろろ、映画もやっているが  
ランドでは運動会が催されている。かといっ  
て、「まさか、いもか」だけではない、各クラ  
ブの展示場では、ボトム戦争から天体観察

やり、藤原朝太郎の研究までの講堂では、弁  
論部の連中がのどまかりして熱弁をふるって  
いる。

彼はぼくろが案内している間、常に陽気だ  
った。でもぼくには姉さんらしい人と藤原が  
少し無口なのが気にかかった。しかしそんな  
疑惑もそのうちどこかへふきとんでしまっ  
た。楽しい時は、あっというまに過ぎる。  
太陽が落ちて行くうとした頃。この文化祭の  
目玉、後夜祭が夕暮の校庭ではじまろうとし  
ていた。ぼくは迷わず彼女をつオークダンス  
にさそった。彼に目をやると、あまりよい顔  
はしなかったようにみえた。「叔めやいてる  
な。レ、どう思。彼女の手をとり、もうはじ







「は由紀子という。彼の顔が一瞬、蒼ざめたような気がした。」

「君と彼女はどういう関係なんだい。」ぼくは聞いた。

「どんな関係といって、どんな関係で中学校時代の同級生さ。」

「長った。ぼくは感のぬけた声をもらした。」

「奥は、彼せを恋したらしいんだ。それで、三週間の自分の胸の片を握りて、彼にぶちまけたつもりだった。彼女の何人というが、岩壁に咲く山ユリのよう

な美しさのこと、五時間目の授業はすでに始まっていたが、すべて彼に告白するとぼくの胸は重いものかとい

ような感じをうけた。けれども彼の返答はなかった。

「どう思う。君はどう思うんだ。」まぢきりなくてたずねた。

「どう思うって、お前が好きな人だろう。好きな人のなり、それで、。」

「いや、ぼくは君の意思が聞きたいんだ。」

「そんなミといつても、何人とも言えないよ。」

「どういふこと。どういう意味なんだい。ひよっとしたら君は誤解するなよ。しかし、。」

「しかし何んだい。」

「、、、。」

「それじゃあ、彼せへぼくの気持をつたえてくれ、たのむ。今思うとあの時よく彼に言えたものだと思う。彼の気持も考えないで、。彼はなまぐら返事をした。ぼくはそれに念をおした。あまりいい気持ではなかったがたがたいと思

った。

それから数日後、校内では関西旅行の話題でいっぱいになって来た頃の日曜日。朝なにげな新園を見ていてハッと

した。よく記事を見ると、もう目の前がまっくらになった。4

藤原が死んだ。自動二輪でセンターラインオーバー。正前が

ら来たダンカと衝突。トラックの下敷になって、即死。三十分ほどたって自分まじりまじしたぼくは、彼の家へと向か

っていた。

彼の家の回りには、たくさんの方が集まっていた。ぼくは

ひとまじり校へもどることになった。学校に着くと、みんなもう集まっていた。あきらかに先生は動参していた。その場で

明日の葬式のことさうちありせて、みんなは解散した。ぼく



くはまた彼の奥に向かった。その日は通夜だったのである。  
「あんな神さまのような奴が、どうして死ななければならな  
ければならぬのか。死ぬべき運中は何にもつといるじやな  
いか。神がいるとすれば不公平すぎはしないか。ぼくは思っ  
た。彼女は通夜に来ていた。目につけばいの愛を夢べーすみ  
でうつついていた。

帰り。ぼくは彼女に声をかけた。彼女の目は涙でうるんで  
いた。彼女を家までおくることにした。せみしゅうだつたか  
らである。いや美しかったのである。すこし歩いてから。

「お姉さんは？」 ぼくはたずねた。

「姉さん？ カヨさんのこと、あの人は私の愛のお手伝さ  
んです。」 彼女はゆっくりと口を開いた。ぼくはだまっ  
た。もう次のコトバはなかった。秋の夜はすこしは  
だざむかった。

彼女の家は、彼の家からさほど遠くはなかった。もう玄關  
の前まで来ていた。彼女は呼びびリンを叩いた。カラランコン。

「はい。」 彼女の母親らしい人が出て来た。

「あの方におくっていたのだ。お姉さんはいい。」

「それはどうも後におせぬに存りました。」  
「いいえ。」 ぼくは心もち丁寧な答えた。

「由起。その方にお茶でもお出しになつたら。」

「いいえ。遅いですが、ぼく帰ります。」 「じゃサヨウナ  
ラ。」 「サヨウナラ。」

帰り道。ぼくの心の中は二つの心があった。あれほど呆然  
としていたけさの気持ちと、今さっきの彼女との散歩での気持ち

での自分の彼に対する愛持の肯定と否定。複雑だった。その  
夜は一睡もしなかった。

翌日。彼の葬式は盛大に行なわれた。花輪は何本も並ぶ、  
中絶時代の同級生や、クラブの仲間がたくさん参列

した。女生徒は涙を流し、男生徒はうつむいて奥座敷へま  
かみしびている。彼女もいくぶん青白い顔をして列席してい

た。またお千代いさんがついて来ている。しかし彼の葬式が  
終り、そこに目ざやると、もう彼女の姿はなかった。その帰

り道。クラブの連中は、各々「人国百んてりかんや、へもん  
だよ。」 「何もあいつが死ぬことなか、たんだよ。」と

かいろいろ話していた。しかしいくつ彼がおしまれたとし



でも、もう彼はこの世には<sup>存在</sup>存しない。死ぬばすべてが終り。ぼくは彼のような死に才はしまい。そう心にいいをかせていた。

彼の初七日も終り、四十九日も終ろうとしていた。ぼくと彼は昨日、瀬瀬川や利根川の川岸を散歩することが多くあった。彼は頼みでも知っていた。いや知りつくしていた。政君問題から前にかつたまで。ますますぼくは彼女にかかちていく自分も感んじた。秋の名巻はあまりに彼女をさげすました。

しかしそれは長くは続かなかった。ぼくの友には、じす異い雪が赤いおぼさうとしていたのである。六十になる。うちのおばあちゃんはその年の三月頃かり買かもたれるといはじめ、五月にかかりつけの医者に見てもらい、精密検査をした所、がんだった。その死の宣告さうけたおばあちゃん、の機体が悪化したのである。おばあちゃんはいささい時から、子守りに出されたらしく、小学校教育はまったくうけてはいなかった。だから文字は読むことも書くこともできなかった。でも氣持がよさかったといのか、近所の人達とは何んの

へだたりもなくつき合っていたようだった。そしてぼくに対しては盲目的な愛をいだいていたのである。そうおばあちゃんがかんだと宣告された時のぼくは、かわいそうだと思っただ。それその時のぼくはかたや、おばあちゃんには、こんな苦しいのなりまて死にたいと、おばあちゃんに困らせた。おばあちゃんのいうはやて死にたいは、もっと生きたいということなのである。もっとも、ほんの少しはその氣持もあつたと思つた。

その月の末、おばあさんの病状も悪くなることゝなつた。死水さとの病もなしく、おばあちゃんはい世界していつた。死水さとしてやつたのがぼくだった。かかせたものなぐさめだつた。夜中の二時から朝が明けるまで、まった。一分が善哉の二時、闇のようを感じられた。東の空がうすうすと明るくなつてきた。ぼくとおやじは近所の交差回つた。おばあちゃん、の死さつたため。朝の太陽は東の空を紅く染めて、雲のほほ以上の輝きをもつてりぼつて来ていた。ぼくは悲しかった。

た。ぼくは愛してくれた人と人間の死というものがま



た。彼こそ愛してくれたい人と人間の友というものがはがなくて  
感じられたからだ。あの時生きていたものは、もうまったく  
いまは生きていない。そこにあるのはひからびた肉体だけ。

葬式が終り、一ヶ月が過ぎた。でもがなしさは着えなかつた。  
學級の勉強にしろ、社会にしろ、あほくさがった。生き  
るってどういう意味をもっているのか。そんな細目のくり返  
しだった。くだらない日々といえどそうなのだろう。彼女は  
いったいどうしているのだろうか。そう思ったのは彼女と最後  
に合ってから二ヶ月近くたっていた。ダイヤルを回す指は  
ふるふる。電話に出たのは彼女の母親だった。彼女は病室  
養のために伊豆へ行っているとのことだった。ぼくの心裏に  
重荷がはしかった。彼女が病気で死んだことまぼくははじめて  
まがされたのである。とういえば、まがらうをことは思いぢ  
ぶ。不安が横切った。手紙を書くことにした。

返事は二週間あひはくるだろうと思っていたが、いっこう  
はこなかった。十二月はあめたたく過ぎ、もう新年は真近  
なつた。二度目の手紙を書いたが、年夫の郵便事情では期待  
はできなかつた。そんな思いを強し昭和四十九年は明けた。

おぼあちゃんがおんだことで、正月は借着にあこなわれた。  
年振れ好きのこのぼくも出したものは極わずがたつた。が彼  
女からは手紙もハガキさへもこなかつた。

冬休みが終り、三学期が始まった。久ーぶりの學校は楽し  
かつた。でも三日もたてばメッキははがれた。ぼくの意志が  
弱い。その通りたつた。でもむざむざ「肉体」をつくるたもの  
の授業なんて、あほりしかつた。

そして二月二十一日。ぼくはまたショックな事件を新  
聞で知ることとなる。彼女が自殺した。病室を去るまでの  
投水自殺と新聞は報じていた。が、みどろきは不思議にも致  
しくなかつた。それはぼくの心の奥底にあつたことだ。たの  
かもしれない。でも悲しみは大きかつた。彼女の愛に行くの  
は恐ろかつた。彼女が死んだことばかりか、それま  
現実には信じなければならなかつた。彼女はまた伊豆の  
海岸に一人歩いているんだ。そう思いたかつた。ぼくはいつ  
のまにか利根川の土手に来ていた。自分のとたつた所、彼女  
と逢つた所の利根川に、い。が大利根の流は死んでい  
るかのようだつた。ぼくは悲しかつた。泣きたかつた。涙が目に



いっぱいになった。走った。利根の流しは夕日さまぶしく照らしていた。涙があとからあとが夕あふれ出た。ぼくは利根の流しの中を覗きつっこんで、泣いた。

それから夕三、四日たった日。一月二十日着用の彼せがらの手紙が僕の手に届いた。

お元氣ですか

か手紙ありかとうございました。返事が遅けなかつたことと、残念に思います。私は御存知の通り病氣療養のためこの伊豆の下田に來ました。あなたも知っているお友伝いと言っていたカヨさんは、私の付きまといの看護婦さんです。うそを言つてごめんねさい。でも私はあなたに、ゆたしが白血病でもうあと数ヶ月も生をうけない体であるということも、知ってほしくなかつたのです。あくまでも一人の若い、健康な女性として見てほしかったのです。交通事故でなくなつた藤原君は、彼が七く存る前日、必死ゆたしの處に來て、あなたの心を話してくれたのです。

藤原君は御存知のようになつた。ゆたしと中學時代の同級生で、彼がクラス委員長でゆたしが副委員長であつたためか、ロマンスをさせられたこともありました。でも現実はそんな甘いものではありませんでした。ゆたしは小さい頃から走ることに自信を持っていましたので、どの時でも多少の勢があるのもは、って、地区対抗の男女現白のりしーに出場したので、中學三年の秋の体育祭の時でした。彼はゆたしと同じチームのアンカーでした。スタートの返手が出だして失敗したため、二番手のゆたしはガンバリました。二人を追いぬいて、三番目の返手にバトンを渡した瞬間。目の前がまっくらになり、ゆたしはそのまおグラウンドにたおれてしまつたのです。すぐ救急車が呼ばれ、病院にはこぼれたようでした。病院の先生は「低血圧のせいだから心配ない。」と喜んでくれましたが、どうも不安でした。その時、つきよつて來ていてくれたのが藤原君です。この後ゆたしの両親のゆたしに村する対応が変りました。一返<sup>返</sup>がないままでもたしかに、。あれから一週間、「念人のためだよ。」



す。

といわれ、病院に通ったことも不母り材料でいた。不母り  
で不母り一人で一夜中泣いたこともありました。でも、  
いやだったんです。自分の病気をたへ死んで行くとし  
ても、知らないうちのことば。それからというものは  
いくつもの医学書を讀みました。そして、わたしの  
病名は白血病と一致した。うらだと思いました。うらだ  
と思いたかったのです。その夜、机に向かっています  
更きたかった。それから一週間後、わたしは病に黙って  
病院へ出かけてゆきました。両親との言ひ争ひさ思うと  
いやだったのです。でも途中で足が進まなくなりました  
たのです。一人じゃこわかった。とき時、母さんが薬  
原君でした。どう思うともうわたしは足は藤原君の薬に  
向かっていました。でも、藤原君はも本当のことは言え  
ませんでした。藤原君もよのことは死すいた火うでした  
が、コウんしだけでついて来てくれたのです。おぼ、とし  
ました。

(41)  
持合堂に藤原君を殺して、わたしは先生の前に行きま  
した。そして病名を教へたのです。先生は初め

わたしをためるぶつに遠回りに話して、わたしは  
「白血病」という名前がわたしの口から出てから、顔色  
が変ったのがわかりました。わたしは不母りおぼえま  
した。でも知りたかった。自分の病気を。先生は白血病  
を治してはいませんでした。わたしはでげました。  
「であと何年。レ、五、五年。」その言葉が先生の  
口から出るか出ないうち、わたしは壁のドアを叩け、無  
中で病院を出ていました。空は青く澄んで、道ゆく人々  
は、わたしを笑うようでした。わたしにはおぼから  
藤原君がトボトボついて来ていることも白ん入りませ  
んでした。

二週間ほど休まりました。鎌倉のあじいちゃんの前で  
一人考えたかったのです。毎日山の上で寝ころぶ。まじい  
空と青い海をみっめをみました。「このまま死ぬのた  
うが、。。」いやだ。不母りたーに低がでぎさこのう  
のがしよう。あの生をさえも焼けて行くことばうたがわ  
しいのです。もう一歩、二週間はアツというま  
に過ぎました。そして鎌倉を離るとき、思いました。短



いけいせいいっぱい生きよう。とって、...  
 帰ってから、わたしは普通の女の身としてすじま  
 した。変わったといえは、少し笑うことが多くなったこと  
 でした。そんな生活の中でわたしは教壇に興味を持ちま  
 した。体の弱いわたしにとって一つの集中できる  
 ものはそれぐらいだったのです。藤原君とは時々会って  
 遊ばしました。でも彼もつずつと衰えていたにしろ、  
 本当のことは知りませんでした。その彼がわたしの長持  
 まつたえに来たのでした。わたしは悩んだ。その交際  
 相手にしても、また自分に對してもキズを張ってしま  
 うまのじやないかと。でもわたしは承知したのです。ど  
 ういうわけだったのでしょうか。あなたには失礼だと思  
 ますが、ただ何人ともなくそうしてしまつたのです。そ  
 てわたしはわたしに對しての甘まはてはじめての傷りだ  
 た。その翌日假死。彼がわたしより先に死ぬなうとい  
 けないことだったのです。そしてあなたとの交際、おま  
 りました。でもわたしは相手も、また自分もキズ一ける交  
 際。あなたともう会うまい。そう思つてこの下に來た

のです。輸血が續く毎日。わたしは何人のためにはきて  
 いるのでしようか。両親には迷惑のかけどころ。ただ、  
 何もできず、患から見える海をみてすこす毎日。わた  
 しの生きることはどこにもつかりない。だから死はと  
 いうのはあまりにおとなげないと思う。でも今日まで  
 さえてきた自分自身も、このわたしは考ゆなき身も、こ  
 のまま残したい。このかりの半年間のわたしはキズを張  
 すだけだと思つる。ここ下田の海は青く、空ははてしな  
 りの人生はここに終りさつげます。挫折したもののな  
 りでしよう。でもわたしはこれで満足です。

一月二十日

十七歳の誕生日

由紀子

ぼくはいつのまにか手紙をそこに置き、走り出して  
 きて、彼女の笑顔をがはじめてめかつたと思つた。しかし  
 山故に自分のささ文は崩れ山だと思つた。  
 やいからまたたくまに半日が過ぎた。三年の準備して理系  
 に進むが、ぼくは、ただの意志とまたたの物体だ。いや物



体になれないようも死に抵抗したつもりだ。本まきちがいの  
 ように詰りあさり、運動部にも入部した。でもおなにかつた。  
 社会の大まな圧力の中でおしつぶさしてゆく自分だだだだ  
 いるだけだった。夏休み。旅に出た。伊豆にも行った。とし  
 ての帰り、電車の中、暗い夜の姿を見つめながら、ふと思  
 った。死のうぐあまりにも簡単に結論だ。それから一ヶ  
 月あまり、ぼくなりに考えたつもりだ。ぼくが例外でな  
 るたゆえには、死の行儀しかない。

そして九月九日。朝日はいつもと同じくゆっくりと登って  
 来ていた。空はすき通るような日本晴れ。身ぶるいがした。  
 家の者は、いつもとまったく変わらなかつた。かみさん、近  
 ごろめ、ざり年とったおやじ、それに二番目の妹。この「幸  
 福」ま自分がこゆすと思ふと、恐ろしかった。数時間後、故郷  
 の地を離れた。この山に向う途中、思ひあひらしたことは何  
 一つましまりなかつた。ただふと決定的だったのは自分が  
 死ぬといふことによつて物体がなくなる事だけだった。

中国では昔この日、重陽の節候には山に登り、長寿さいの  
 ったという。皮肉なものだな。そう思った。

翌日の新聞はつたすめた、こう報道していた。  
 9月9日未明、岩手山山頂から高校生飛び入り自殺。原因  
 は大学受験からのノイローゼか、...

完

あとがき

ぼくの高校時代は無我夢中で過ぎた。今思うといろいろ  
 のことを思い出すが、自分でいれはやつたというものはな  
 い。でも悔いはない。ぼくは常に理想を追い求めてきた  
 つもりだから。でもその中で時々過去をせうりやむことがあ  
 る。でもその過去がいつか今の自分がある。悔いがある  
 成長する。それはたしかなことだ。ぼくは今少年ではなく  
 なった。何に対しても無我夢中でぶつかつてゆく少年では  
 なくなつた。そのどよめきがあることを知つた青年である  
 しか、常に東京を見つめる青年である。  
 この日から大学受験がある。自分の一生を決めるだろう其  
 職のりこともある。結婚もある。これからみんながバラ  
 になる。それはしかたのないこと、むしろ一人立ちしてゆ  
 く喜びしいことだ。でも心はいっもいっしよでありたい。  
 ぼくたちがいつかから生きて行くうえ。  
 この小説はフィクションである。事実も少しはいつては  
 いるが、たゞの架空の世界である。ぼくに現実をすてる  
 ことはできない

徳高三年 八月

いまのこの長柄、もう明日は思えないかもしれない  
 だから、書きやめておきたいんだ  
 それ小は、次が世代の若者達を理解しよう。  
 その若者が世界を創る





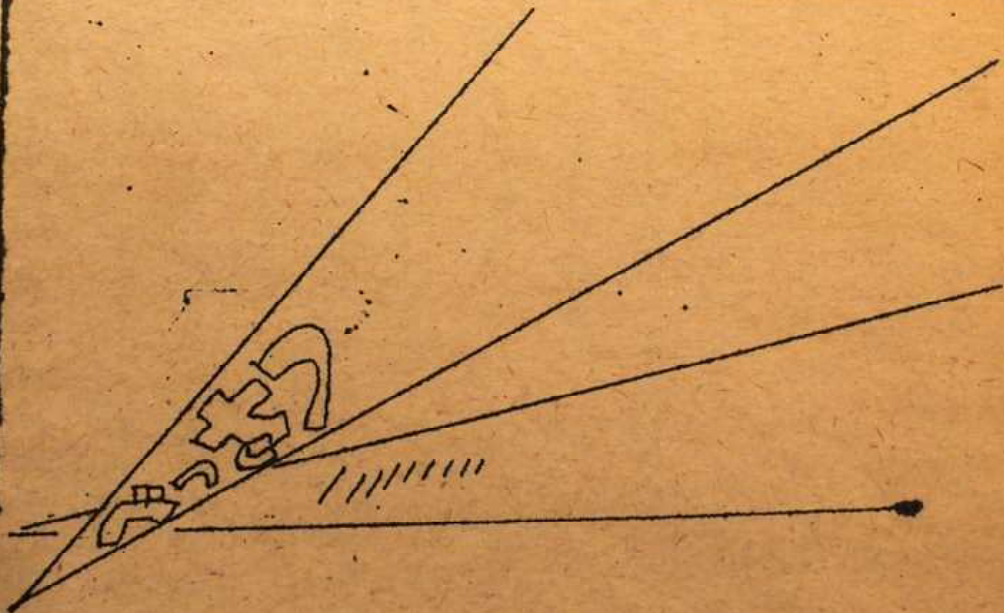
別冊

かとり

せんこう

規則正しい波

つれづれなるままに





# 規則正しい彼

（健二）　こゝろへい

肩にくい込むリックのベルトが痛かった。それはまた黒羽健二のこれからのひとり旅の苦痛のバロメーターでもあった。

地下道の階段から出た時にはすでに九番ホームに新潟行、七〇九M、急行佐渡五号のナンバープレートをかかげた列車があった。時計を見たら23時4分だった。健二は重いリックを降して窓側の座席に座わった。やはり夜行での旅行者が多く、ホームは、赤や黄や緑などカラフルな色で満ちていた。

「23時24分発、新潟行、発車します。」とアナウンス

スがあった。「ガツクン」と鈍い金属性の音とともに列車は動き始めた。

健二は一人旅である。いつもは友人と行く事が多いが、この旅はなぜかひとりで行きたかった。やはり高校生若最後の夏休みが彼にさうさせた原因のひとつかもしれない。

列車の中は満員ではなかった。しかし、席がガラガラというわけでもない。今日が土、日曜日とかの連った日ではなく、火曜日という中間の日であったせいだろう。

健二の乗っている車の後方では七、八人の男女のグループが声高らかに、若さいっぱい騒いでいた。その声が面白い。そう健二に自分は一人旅である事をおもわせた。健二はリックからウーン、







る客が出口に移動し始めたからだだろう。新津駅の  
一番ホームに、五時四〇分発の秋田行の蒸気機車  
が入って来た。健二が上野発二三時二四分に乗っ  
たのも、だんだん廃止され行く蒸気機車に乗って  
みたく、時刻表で列車番号に、D・Mのない列車  
に合せたものであった。

やはり健二と同じような考えの客も多く、中にはさっそく先頭に行つて写真をとるマニアもいた。  
羽越線は「新発田」を過ぎると日本海に沿つて走  
っていた。健二はしだいに廃止されていく蒸気機  
車に乗つて人間の一生とそれを比較していた。

そんな事考えていると「ポーポーポー」とトン  
ネルに入る台風の三回笛が鳴った。おもしろいも  
ので蒸気機車は汽笛の回数によつて「出発」「ト

ンネルに入る」とか台風があるのだ。というのは  
蒸気機車の場合、トンネルの中では煙が充満して  
客室の中に入って顔がススですすけたり、服装な  
どもススだらけになつてしまつたら、窓ガラスを  
締める台風でもあるわけだ。

鼠ヶ関の町は小さかった。一本、日本海に沿つ  
て走る道路があるだけで、その他は静かな地域で  
ある。海水浴場がある事あるが泳いでいる人は少  
なかつた。

午後三時過ぎの太陽はまぶしかった。健二はすで  
に張つたテントの中で昨夜の列車の疲れをとるた  
め昼寝をされていて、今、あの太陽の暑さに目をさ  
ましたところであった。

このキャンプ場は海岸の砂浜を有甲して作られ



(4) しているのデテントから出るとすぐ泳げた。健二は  
海軍パンツになって50mぐらい先に泳いでいるま  
る木船まで泳いでいった。日本海軍船の揺ほい、  
つめたさをひめた波が彼の泳ぎをじつとながめて  
いた。健二は休みぬのに都合の良いまる木船の上で、  
キラギラ輝りつける太陽が海水に反射して銀色に  
たこのを見ていた。すると岸からこっちに向けて  
泳がしだいに大きくなるものがあった。健二は手  
ごさしのべた。すると、大きな目をパツチりあげ  
はは笑みさうかべて健二の手を握ってまる木船に  
乗った。柔らかかろうな乳房がブラジャーの中にか  
くれているビキニスタイルの髪の毛が長い女性で  
あった。「どうもありがとう」と若々しい声で礼  
を述べた。「いりえ」と健二はてれくさそうに言

った。二人しかこのまる木船にいない事が彼をそ  
わそわさせた。それはまだ健二が若い、清純さと  
彼の高校が男子校のせいだったかもしれぬ。  
太陽はまだなお、まる木船をキラギラ輝してい  
た。

彼女はごく自然のように太陽をいっぱい吸収  
しようとして狭いまる木船の上で仰むけになった。柔  
らかかろうな乳房は太陽に向い。彼女はまぶしさを  
に目をじていた。その様子は無言で健二に女性  
は男性よりも太陽にさらす表面積が少ないのが不  
満だとささやいているように感じた。健二はソ  
ろこで休んでいられたなくなった。まる木船の端に  
たつと、健二の脇幅の広さ、背の大きさ、筋肉質  
の足が、太陽にましてまぶしかった。健二は高く



ジャンプして「サッパニ」と水の音を出て飛び込  
んでワールでもとの岸の方に泳いで行った。そ  
の姿をじっと目を通して見ている者がいた。

鼠々関には海水浴者が少なかった。やはり、日  
本海の波はつめたく、陰気くさいというイメージ  
が強いせいかもしれない。この水泳ジャンプ場も  
二、三張りのテントしかなかった。

夕食の用意は男である健二にとって苦痛である。  
カツから米や、ハンゴ……その他、夕食の用意  
に必要なものを取り出した。ジャンプ場の炊事場  
で米を溶いだけ、野菜を洗いに健二の隣りの小道  
を渡り始めた。健二は慣れない手つきで米を洗い  
ていた。ふと隣りを見ると先ほどのまる木船の上  
に居た彼女だった。彼女も健二である事がわか

ったとみえてニコリとした。健二も軽く会釈した。  
あの目がパツチリした、髪の長いあの子である。  
赤々とハンゴを熱している炎をじっと健二にみ  
つめていた。そしてその炎の中に写るあの顔をほ  
うぜんと思いうかがべていた。

あの柔かい手の感触……忘れられない。突然「  
火事」火事」という女性の高い声が聞えた。そ  
の声の方を向くと、向うのテントの近くで炎が二  
m近くなっているのが見えた。

「砂をかけるんだ」「砂を」と彼女らをかきわ  
けて健二は言った。すると今まで何もせずに自然  
と立っていた彼女らも健二の指示にしたがって、砂  
をかけた。

調理に使うホへブスの石油がこぼれて近くの



(6)

本に火が燃えた程度でたいしたこともなく火は消えた。

「だいじょうぶですか？ホヘブスの石油がもれていじょうぶですけど、ちゅんちゅんとふたをしてくださいま、」と彼は警察官みたいな口調を言った。

「ありがとうございます。茫然としちゃって何とていいかわからず……たすかりました。どうも」と礼を述べた。すると髪の高い女の人が、

「ゆあ、手に、」と健二の右手をさした。健二も言われてみるとキズ口から赤い血がながれていた。

「ああ、だいじょうぶですよ、何かにはひっかかったんでしょ？」というと、彼女らは何かにひっかかっただんどしょつとズボンでも破ったいに気楽に言った言葉がおもしろくワクスクスと笑ったのだ。そ

れを察して健二もニヤニヤ笑って立ち去った。

健二はこげついた御飯にボンカレーをかけてたき火の残り火に向ってさびしく食べていた。そのころ彼女らはミトちゃん、ヨシちゃんが明日の朝の食事のおかずを買いに、美幸だけ長い髪をなみかせながら健二のテントの方に、救急箱を持ってかけていた。

満月前の月は雲の間から顔を出していた。「ここにちは、手、痛まないしとすみぎった声で彼女は話しかけてきた。健二が振り向くと彼女はほほえんだ。「だいじょうぶだよ」と健二は手を出してみた。しかしキズは赤くはれていた。彼女は救急箱をもって健二の隣りに座わり、健二の右手を彼女の方向に引っぱった。そして彼女の膝の上に置



いて殊をぬり、包帯をしてくれた。健二はその間じつと彼女の横顔を見ていた。時々潮風にかかれて彼女の長い美しい髪の毛が健二の顔に触れていた。「ありがとう」と健二が言うと、「こちらこそ、あの時に来ていただけなかったら私達……ほんとうにどうもすみませんでした。」彼女の口調はさわやかだった。キャンプファイヤーほどの明るさはないとき火の残り火は紅あかにふたりを照らしていた。「どちらから来たんですか？」と健二はたずねた。すると彼女は「酒田です」と言った。「おたくは？」と群馬です」と健二も同じようにたずねられた事だけを答えた。「群馬の館林。御さくいですか」と言うと、彼女はすまないように顔を横に振った。

そんなあたりさわりのない会話が続いた。

彼が砂浜にうちよせる音はなおも規則正しく続き、たき火はかなり弱々しくなってきた。「私帰ります。ミーちゃんとヨシちゃんが待つているから」と言うと彼女は手を振りながら去って行った。その後姿をじつと見ていた。彼女が帰る頃は互いにしたしくなり、もうずいぶん長い付き合いの友達ふうしにみえた。しかし、先ほどの会話が妙なことに、互いの名前だけはつげなかったためであった。それはなぜだろうか健二にもわからなかった。

「ザブーン……」ザブーン……波の音は続いていた。健二はテントの巾を横になって明日の天気予報を聞いていた。明日は前線が南下するので、今夜



的に日本列島は雨降りらしいとの事である。テントの入口に人影が月の光に照らされて、写っていた。健二はテントの外に出てみた。するとその人影はあの彼女だった。

「リングを食べる？よかったらと思って持って来たんだけど」とつぶやいた。「ありがとう、好きだよ、リング」と言った。青いリングは彼女の柔らかなような手の上にあった。そのリングを健二は取ると、「散歩しない、あの防波堤まで」と健二は指さして言った。その防波堤はここから五百メートル近い所にあつて暗やみの海に100メートルくらい突き出ている物があった。

「暗くまこわいなあ」と彼女はためらった。「だいじょうぶだよ」と健二は訪つて手をさし

のべた。この動作に健二自身驚いた。自分がこんなふうにならぬ女性に手をさしのべたのは始めてであり、自分の意志ではなく手が反射的に出たのであった。昼の暑さとはちがつて潮風がすずしく、彼女の長い髪の毛が健二の首すじに触れていた。先ほどからつないでいる左手は彼女の柔らかな手ともにはんりの汗ばんでいた。

防波堤はセメントでできており幅が一メートルである。二人はその防波堤の上の沖の方に少しづつ歩き始めた。静かな夜であった。音といえば先ほどから「バシヤン」「バシヤン」と波が防波堤にあたる音だけであった。暗やみであったが月の光が二人の足根だけを照らしてくれていた。

突然「バシヤン」と、沈黙を敷しくうち破る音が



した。彼女は暗やみのその音に心蕪がさけちぎれ  
るほど驚いて健二の腕に抱きすがった。その驚き  
が彼女の鼓動が柔らかい乳房から健二の腕に伝わ  
るのがはつきり膚で感じた。健二も一瞬驚いたが、  
その首がカエルが飛びこんだ事がわかると冷静に  
なった。そして、やさしげに、「だいじょうぶだ  
よカエルだよ」と慰めるように彼女の耳元で  
ささやいた。彼女は顔を上げてまだ驚きがさめぬ  
顔して健二を見つめていた。だがまだ驚きがさめ  
きれずにうつと健二に抱きすがっていた。

健二は彼女の背中に戻して、もつと、もつと強  
く彼女を引き寄せた。そして、彼女の口びるを訪  
った。その間彼女は目を軽く閉じて健二のなすま  
ひをみた。健二はひさびさのように彼女の口を吸、

た。強く強く彼女を引き寄せて……。彼女は自分  
の体が自分であやつれなくなっていた。足もとが田  
い浮いている感じである。その体をどうにかしよ  
うとただ夢中に健二によりすがり、自分の体を健  
二に預け強く強く健二にしがみついた。体はおび  
えたように堅くなっていた。なま暖かいものが彼  
女の口に侵入してきて、彼女自身のなま暖かい物  
にからんで来た。

「サブーン」「サブーン」なおも波の音は規則  
正しく音を立てていた。潮風は彼女の長い美しい  
髪をなびかせていた。

テントの中はすべての物を黄色に代えていた。  
そして彼女の体も例外なく黄色にしていた。彼女



は抵抗せずに健二のするままであった。健二がおもっていたように彼女の乳房はやわらかかった。子供のおもちゃのようにたいせつにすると彼女はぐったりとなり、健二のされるままであった。

「して」

「もし、ふきたら、それにおれ始めて」

「だいたいようぶ、もう、なにをされてもいいし」

「うう……」

「今までだいいじにしてきたものあなたにあげた」

「し」

すると、今まふふたりしていた彼女の手が健二の男の部分に近づいて来て、軽く握った。健二は強く彼女の口びるをすすり彼女を握きしめた。今まで健二が無知であったなほに少しづつ

健二は近づいていった。それを遠のけようとする彼女が不意に脚を開いた。健二がその名にすいこまれかかると、彼女の体が急に「ピクッ」と堅くなり健二の侵入をふせいだ。しかし、また、気孔は開き健二の侵入を望んだ。健二の指先が吸いこまれ窮屈を感じた。

「してし」あまたにあげたい……うう……健二は自分のものを握りその若さを感じた。

「うう……」「アア……」

どのくらいたっただろうか、砂浜の夜になってもさめきれない砂が妙に印象に残っていた。外は規則正しい波の音だけがあった

——道のべ砂浜の幕 3——



小倉 文雄

期待

私は、新聞部に、二つの期待を抱いていた。それは、「高校生生活の中で何かを得よう」と、言う私の願いを新聞部が適えてくれるような気がしたからである。新聞部（先輩・TON）は私に何かを手えてくれる最良のものだった。しかし、必然的には何も手えてくれなかった。私の期待は破れた。そして、その時私は、クラブに対して失望さえ感じた。私の描いていたクラブに対する理想（何かを手えてくれる）があまりにも簡単に破れて当然だったのだ。なぜなら決して他から私に与えられることはない。自分で得ようとするのか期待

となく、正から。

新聞作成の中からの

クラブにまともなまりがなく、部員も少ない、さらに新聞技術など何一つ知らなかった。こんな状態で、中で作ろうとした新聞。予想以上に困難だった。私自身も苦しい、苦しい、という苦痛ばかり感じて新聞など作りたくないと思った。そして新聞作成から逃げるために新聞など作、ても少しも自分の求めるものは得られないと自身で批判した。そして、新聞部というクラブ自体からも逃げたく思った。自分から逃げようと思、たのかもつ、しかし、逃げることはできなかった。勇気がなければ、この事も知らない。ここで逃げては……。という悪地があったのかも知れないが、それ以上に



逃げることでできない何かの魅力のためだったように思う。その魅力とは、同じ苦しみを乗り越えようとする同志の連帯感（友情）であつたかも知れない。

私は新聞作成などしたつて何も得られないと思つていた。しかし、連帯感（友情）を得ることができた。そして、これからは何をしようとしていくのかが明らかになった。

話し合いのヒナレ

私達は、よく話し合いをした。新聞を作る時、各人の考えを知ろうとした時、T・D・Nのことについて、皆、思ったことを言ひあつた。ときには、話し合ひができず、白けたこともあつた。そのような時は、そのことについて突き止め合つた。私も、

思いにまかせて話しをした。そして、私は各人の考えを知ることができた。そして性格も、そして理解もある程度深まつたと思う。ときには、私も思つたことをさらけ出して、ある程度、心を開いて話したこともあつた。それは、自分の考えを全部さらけ出すことによつて、安心を感じることができたからだ。それはやはり理解が深まつた、心を許すことができた証拠だと確してゐる。

話し合いを満足いくまでした時、私は話し合いをこのまま終わすということに何か、空しささえ感じた。もっと話し合いをしていたい。何か一つのことを皆で、行ないたいという気持ちが入み上げるのを感じた。これは友情だつたのかも知れない。



TONのこと

初め私は、TONとは、自分自身も活動してい  
く。一人であるとは思わなかった。誰かが行うま  
まに私自身流されていけばよいと思っていた。だ  
から、TONの重要性などわからなかった。とい  
うより気にもしなかった。また、TONの存在が  
わかつた時疑問、不満は非常にあった。でも、そ  
れをTONにバツけて積極的ニ行動しようという  
志欲はなかった。レカレ、TONを通して何でも  
いいから話したいという気持ち、切にあった。  
レニウが、執行委員となつて見ると、不意義と  
自分の力でTONを最も良いものにしようという  
意欲がでてきた。今まで関心などあまりなかつた  
ものが一番関心のあるトニエ、レニウと手かバこ

とはほとんどTONのことばかりだった。レカレ、  
意欲はあつても、活動をうまく進めることができ  
ないのは、自分自身なせひなく思った。そして  
悲しさを感じた。ヘエの他いろいろ心境の変化  
もあつた。

私は執行委員をした結果、TONに成長となる  
ようなことはできなかった。レカレ、そうなるよ  
う努力をした。そして自分自身に、大きなプ  
ラとなつたということでは満足をしている。それ  
から、なんでも恐れず、行なうことによつて、道  
は開け、また意欲もわいてくるものだと思信する  
ことができた。レカレ残念に思うことは、TONの  
皆人など真に心から話しができなかったことであ  
る。レ私は一番、望んでいた。